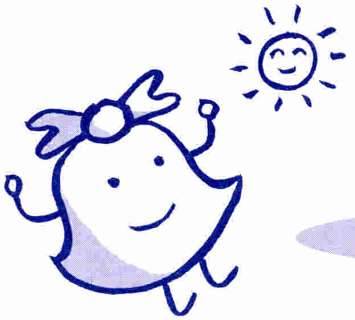
— 京都市ごみ減量推進会議 —



こごみ日和

～みんなでごみゼロ～

No.44 2010.6

時間を紡ぐ。新しい価値の求め方がそこにある。

前号に引き続き、秦めぐみさんとお話します。

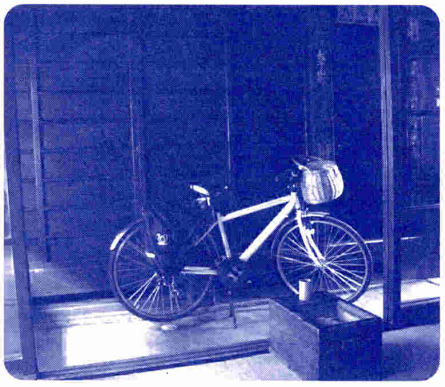
消費に頼らない創造的な生活をどう取り戻していくか、そこのお話を続けていただけますか。

「それは難しいことではないのです。ほんのいっとき忘れていたことを、ひとつひとつ丁寧に思い出していく。その思い出したかけらをつなぎ合わせていく、紡いでいく。そんな努力が、これから大切にされていくのではと思います。」

「例えば、縫物もそのひとつ。余った糸で模様を縫い上げていく。そして完成した布巾を皆さまにお見せすると“わあ”と声があがる。縫い糸の残ったもので、思うがままに糸目を走らせて作った布巾なのですが、そこに魅力を感じて頂ける。

一つ一つの目が均一に揃っていたりでは決してないのですが、その不揃いにぬくもりがある。生活の片鱗というか、その人のオリジナルが醸し出される。そんなところに人々は価値を見つけようとしているのではないでしょうか。」

少し前まで持っていた価値とは違った、別の価値の世界へ人々が移動していると。ところで秦さんはスポーツサイクル（自転車）をお持ちですね。



「はい。私の愛用品のひとつです。家からの行動半径が4キロを超えるときはよく走ってくれるのでとても重宝しています。例えば家から大文字山の麓までとか…。京都の町は自転車での移動が便利ですね。大文字山まで行くときも、できるだけ車との摩擦が避けられる道を選んでいます。走っていて、ちょっと、ここは気持ちいいなと思うところを探しながら、ときには寄り道したり。」

「ふと通りがかったお店がとてもセンスの良い花でウィンドウを飾っている。私は思わずカメラを手にとってシャッターを切ります。まるで観光客気分ですね。でも、持っている買い物袋にはお豆腐が入っているんですよ（笑）。」

ずいぶん充実した時間を過ごせる訳ですね。それは秦さんの『とっておきの時間』。そんな時間をプライムタイム、何にも代えがたいひとときと呼んでみたくなりました。

「いいですね。そういう意味では年末のお餅つきも私のプライムタイムでしょうか。蒸しあがったもち米のいい香り。キリリとした冷気の中を白い湯気がふわーっと上がって。つきたてのお餅で作ったおろし餅は、ほんとに美味しいです。そういう生活体験をすることが、今は難しくなっているのでは。」

お餅が持っているチカラ。出来上がっていく過程を共有する喜び。貴重な時間体験ということですね。
秦さん、ありがとうございました。話は尽きませんね。いつか読者の方も交えて、お餅づくりをしたいものです。

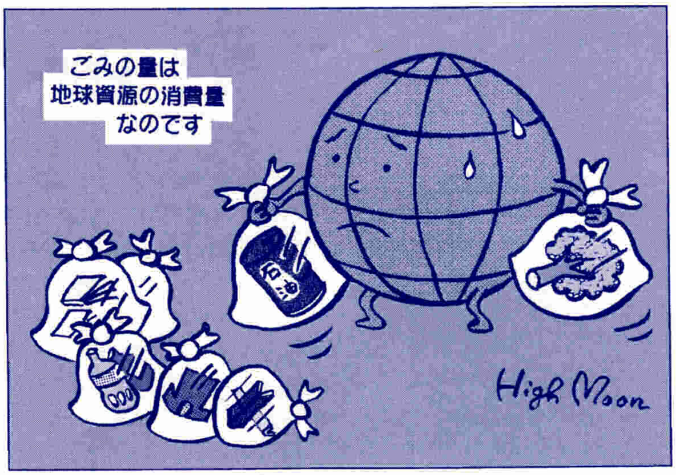
「はい。ありがとうございました。」

取材:大橋正明

「ごみの正体」

京都市ごみ減量推進会議会長　**高月　紘**

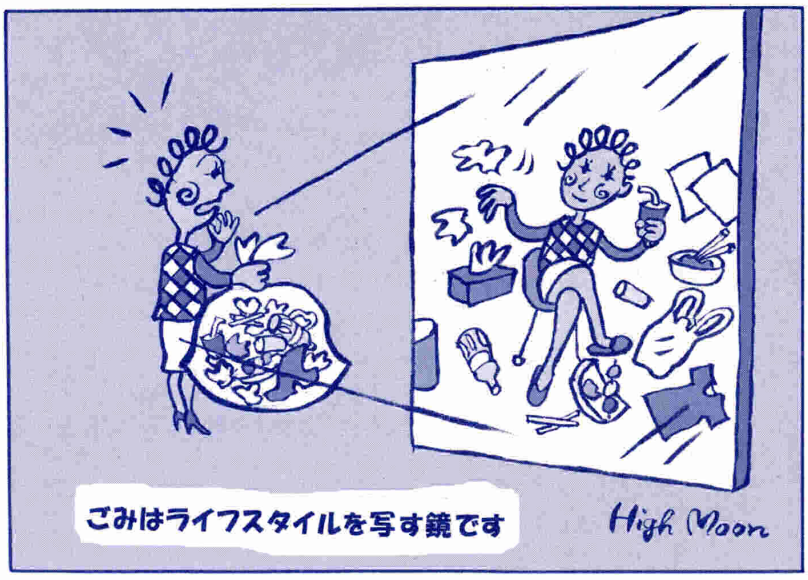
あらためて、「ごみとは何ですか?」と問われると、ごみの専門家と言われる筆者も「う～ん、ええ～と」と明快に即答できない。せいぜい「ごみとは要らなくなった物、がらくた」などと、ありきたりの答しか思いつかない。しかし、ごみと呼ばれる物の過去から現在の姿を見ることによって、しだいにその正体が明らかになってくる。一昔前にはごみは「塵芥(じんかい)」と言われてきた。「塵」は文字通り、「ちり」であり、小さい粉末である。「芥」は「腐ったりしてうち捨てられているもの」の意味である。したがって、昔のごみは、本当に価値のない、小さい不衛生なものでしかなかったのである。とは言え、街に塵芥がそのまま放置されていると、公衆衛生上問題であるので、当時の街の管理者は街を掃き清めること、すなわち「清掃」に努めたのである。このことは、現在、市でごみの処理を担当する「環境政策局」がかっては「清掃局」と呼ばれ、国の法律である「廃棄物処理法」の前身は「清掃法」であったことにそのなごりをとどめている。



さて、時は変わり、あらためて現在のごみを眺めてみると、塵芥のイメージとはほど遠い、捨てられた製品、商品の集合体である。しかも、その多くが使い捨ての製品であり、使い捨ての商品である。日本の場合、この状態が顕著になったのは1960年代からのいわゆる高度経済成長の時期からである。それまでは、日本の家庭ごみ量はたかだか1人1日100～150g程度であったものが、高度経済成長期を経て一気に1100g／人・日と10倍近くになってしまったのである。

人間はこれまで生活をしていく上で、なんとか安定的に「衣食住」を確保できないかと努力をしてきた。そして、経済的に貧しい中でもそれなりに手間をかけ、工夫をして生活をして来たのである。しかしながら、経済的に少し余裕ができると、人は「もっと楽に、簡単に、便利に、そして快適に」を求めて生活をし始めたのである。

例えば「衣」でいえば、昔は自分で縫い物をしたり、繕いをして衣服は大切に扱っていたが、今は流行（ファッション）性も手伝って、ほとんどが何回も着ずに捨てられる。「食」もしかりで、以前は素材から調理をしていたが、手間ひまがかかるので、現在は調理済みの加工食品を購入して電子レンジ等で温めて食べる「中食」がはやっている。しかし、そのために沢山の容器包装材と食べ残しが捨てられることになった。飲料容器も手軽さがうけて、再使用タイプの「びん」から、使い捨てタイプの「缶」「ペットボトル」が主流になった。「住」も日本の建築物は快適さを求めてどんどん壊され建て直されている。平均寿命がわずか30年といわれているが、結果的に膨大な建築廃棄物が発生している。



このように見てくると、結局は急激に増えたごみの中身は、私たちが「もっと楽に、簡単に、便利に、快適に」を求めた生活スタイルが生みだしたものである。言いかえれば、現代のごみは「利便性」の代償とも言える負の遺産なのである。しかも、そのために貴重な地球の資源やエネルギーを大量に消費しているのである。

シリーズ

「みんなで考える」

「エコまちステーション」から未来の地域づくりを考える!

インタビュー：上京エコまちステーション環境共生推進員　森川　善孝さん
醍醐エコまちステーション環境共生推進員　望月　実さん
司会進行：みんなのヴィジョン創造研究所代表　大橋　正明さん

森川　善孝さん

平成22年4月1日から、京都市内全ての区役所・支所に新設された「eco(エコ)まちステーション」。いったいどんなサービスを行っているのか、皆さんご存知でしょうか?

今回は、地域の皆さんと環境行政をつなぐコーディネータ役とも言える、環境共生推進員の森川さんと望月さん、そして司会進行役の大橋さんにお話を伺う中で、エコまちステーションがごみの減量のみならず、地域づくりの中心的な存在となる可能性や、今後の展望について考えてみたいと思います。

「エコまちステーション」の役割の1つは、暮らしと密接に関わる「ごみ」に対する市民の疑問に答えること。家庭ごみの分別方法や正しい出し方、地域清掃時のボランティア袋の配付、市外からの転入者への説明など、市民の“どうすればいいの?”という声に答え、暮らしと直結したサービスを行っています。環境共生推進員はごみの出し方のマイスター。乾電池は?蛍光管は?すぐにお近くの回収拠点・回収方法を案内してくれます。カラスの被害ももう安心、エコまちステーションでは防鳥用ネットの貸出も行っており、市民の声を積極的に取り入れ、ごみ収集の日を気持ちよく迎えてもらうためのサポートも充実しています。

もともとこれらの業務は、各区のまち美化事務所で行っていましたが、区によっては交通の便が悪く、市民が気軽に訪ねられる施設とは言えませんでした。そこで、まち美化事務所の相談窓口は残しながら、より利便性の高い区役所・支所に環境拠点を増やすことで、高まる市民のニーズに応えようと、この春に新設されました。

「エコまちステーションへの認知はまだまだ広がっていませんが、この4月に寄せられた相談や問い合わせは、昨年同じ月の4倍近くにも増えています。」と望月さん。この反響からも、市民が「ごみ」や「地域の環境」のことを気軽に相談できる場所を求めていたことが分かります。

2つ目の重要な役割は、ごみの減量を市民と一緒に進めていくこと。現在、京都市が力を入れている「使用済てんぷら油回収」や「コミュニティ回収」は、町内単位等でごみの減量に取組むことで、ごみに対する意識を各家庭から変えるという大きな成果を上げています。

望月　実さん

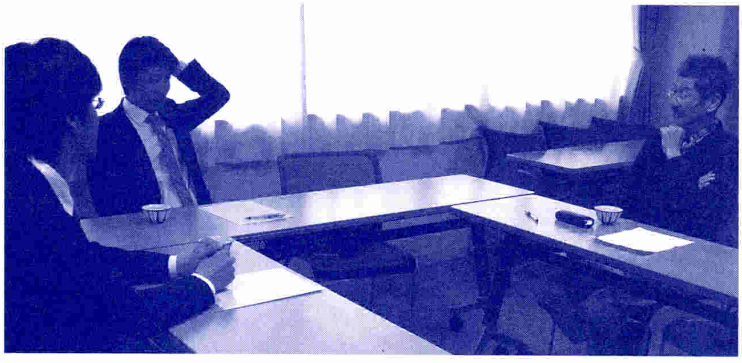
シリーズ「みんなで考える」

本年も広く市民の皆さんに参加を呼び掛けており、使用済てんぷら油・コミュニティ回収とも、本年12月末まで新規申込みを受け付けています*1。登録団体の手続きには、町内への呼び掛けや書類作成などで、特に代表者の方にはご負担を掛けますが、「提出書類の簡素化など、市民の方への負担軽減を進めていきたい。そして、より多くの方々にこれらの取組みに参加頂けるよう、働きかけを続けたい」と、森川さんは熱く語って下さいました。この二つの制度は、回収内容によって一定の助成金が支給されますので、「私の町でもやってみよう!」という方、ぜひお近くのエコまちステーションにご相談下さい*2。

そして3つ目が、これから最も注目をされる「ごみの減量を通して、家庭から町を、町から地域を、明るく元気にする」という役割です。エコまちステーションに寄せられる声の中で、“地域で環境学習や見学会を企画したいので、良いアイディアはないか?”という相談が増えています。これは、市民の皆さんが、ごみの減量を通して地域活動を復活させたい、より良い地域づくりに活かしたい、そんな熱意の表れなのではないでしょうか。

「地域の方々は、環境について学ぶ機会を求めておられますし、私たち環境共生推進員も地域に役立つ学びの場を提供したいと考え、その方法を模索しています(森川)。」「地域へ積極的に出向いて、何が求められているのか、現場の声を大切にし、その実現に向けて精一杯努力します(望月)。」

本来の地域づくりは、行政主導ではなく、そこに住む世代を越えた人々が、課題に気付き、放置せずにじっくりと向き合い、対話を重ねることで始めて実現します。有料指定袋の導入で、「ごみの処理には費用がかかる」という認識は広がってきました。今後は、その認識を地域の人々と共有し、そこからどう住みやすい地域社会を創るのか、次のステップに挑戦する時期に来ています。市民の希望と、行政の期待をつなぐ、エコまちステーション。お二人の目標は、その地域の魅力を見直し、エコまちステーションから地域づくりへと、ゆるやかに、しかし確実に動き始める一歩であると確信しました。



取材日:平成22年4月28日
取材:松村　香代子

*1　使用済てんぷら油回収・コミュニティ回収とも、新規申込みは平成22年12月28日まで(定員になり次第終了します)、募集案内等は、下記にて配付しています。

○募集案内等の配布場所
ア 各区役所・支所のエコまちステーション
イ 各区役所出張所
ウ 各まち美化事務所
エ 市役所庁舎案内所(本庁舎,北庁舎)
オ 環境政策局循環型社会推進部まち美化推進課

*2　<各エコまちステーションの連絡先>

●北エコまちステーション	(北区役所2階)	電話:075−366−0155
●上京エコまちステーション	(上京区役所2階)	電話:075−366−0776
●左京エコまちステーション	(左京区役所3階)	電話:075−366−0821
●中京エコまちステーション	(中京区役所1階)	電話:075−366−0180
●東山エコまちステーション	(東山区役所2階)	電話:075−366−0182
●山科エコまちステーション	(山科区役所1階)	電話:075−366−0184
●下京エコまちステーション	(下京区役所1階)	電話:075−366−0186
●南エコまちステーション	(南区役所1階)	電話:075−366−0188
●右京エコまちステーション	(右京区役所1階)	電話:075−366−0190
●西京エコまちステーション	(西京区役所1階)	電話:075−366−0192
●洛西エコまちステーション	(洛西支所1階)	電話:075−366−0194
●伏見エコまちステーション	(伏見区役所1階)	電話:075−366−0196
●深草エコまちステーション	(深草支所1階)	電話:075−366−0198
●醍醐エコまちステーション	(醍醐支所2階)	電話:075−366−0311

○ホームページ
使用済てんぷら油回収事業:http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000061897.html
コミュニティ回収詳細:http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000079051.html

京のこの人にインタビュー

醍醐西地域ごみ減量推進会議
会長　**吉村　睦子さん**

吉村　睦子会長

地下鉄醍醐駅下車すぐ、京都市営住宅が立ち並ぶ一角に吉村会長の活動拠点、伏水（ふしみ）サポートネットワークがあります。長年、会長自らが切り盛りをされてきた牛乳屋さんのお隣に事務所を構え、以来毎日賑やかに活動を続けていらっしゃいます。

醍醐西地域は世帯数が多く、子どもからお年寄りまで幅広い世代が行き交う町。この団地には、家族ぐるみでのお付き合いが今も残っており、地域コミュニティが息づく町でもあります。

吉村会長が醍醐西地域と積極的に向き合うようになったのは、今から約7年前。きっかけは、何と60歳を過ぎてから社会人入学を果たした立命館大学での出会いでした。四年間の大学生活では心理学を専攻、その傍ら、以前から興味があった社会学の授業を聴講する中で、産業社会学部の中村 正（まさ）教授から大きな影響を受けることになります。「せっかく大学で学び、豊かな人生経験があるのだから、ただ卒業するだけではもったいない。今後は、地域に役立つ活動を実践してみてはどうか。」中村教授のその一言が、吉村会長の心を大きく揺さぶりました。早速、女性会などの仲間に呼び掛け、地域のことはまず自分たちで取組もうという強い決意の下、立ち上げたのがこの“NPO法人　伏水サポートネットワーク”なのです。

打合せの様子

右から、吉村会長、庶務 川那辺さん、副会長 中村さん、会計 水戸さん

伏水サポートネットワークでは2003年10月の設立当初から、地域の子育て支援や高齢者の生活支援を続けてきました。近年では、京都市がその活動の重要性を認め、市政に取り入れたため直接的な活動は休止していますが、これも吉村会長の先駆的な提案が実った結果です。中村教授の助言が、より良い地域づくりにつながった事例とも言えます。

現在、力を入れているのは、やはり環境学習。小学生を対象とした、エコまち探検隊や地域ごみ減での啓発活動は、地元の皆さんからの期待も大きく、毎年アイディアを出し合い企画しています。今年度からは女性会環境部の活動も充実させ、年間を通して環境学習に意欲的に取組む予定です。

吉村会長の今後の大きな夢は、平成16年に運行が始まった醍醐コミュニティバスを、この地域で集めた使用済てんぷら油をリサイクルした燃料（BDF）で走らせること。この醍醐コミュニティバスの運行は、地域住民が総力を挙げて数々の困難に打ち勝ちながら実現させた、日本初のコミュニティバスの歴史でもあります。平成21年には、門川市長を囲んでの“おむすびミーティング*”を開催し、関係者と共に熱い議論を交わしました。地域の宝を、更に魅力的な活動へと繋げたい、瞳をきらきらとさせて語る吉村会長の話に想いがこもります。

子どもにも高齢者にも優しい地域づくりを、そして地域から市全体へとそのノウハウを惜しみなく伝える吉村会長の活動は、まだまだ留まるところを知りません。

取材日:平成22年4月19日
取材:松村　香代子

*おむすびミーティング…市長自らが,市民活動の場や市民の皆様と行政が協働して実施するイベントなどの中に飛び込み,市民の皆様の願いや要望に直接耳を傾けるとともに,未来の京都を共に語り合う場。活発な意見交換の中で,多くの市民の皆様の思いと知恵を受け止め,市政運営に反映させていきます。

詳細:http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000054277.html

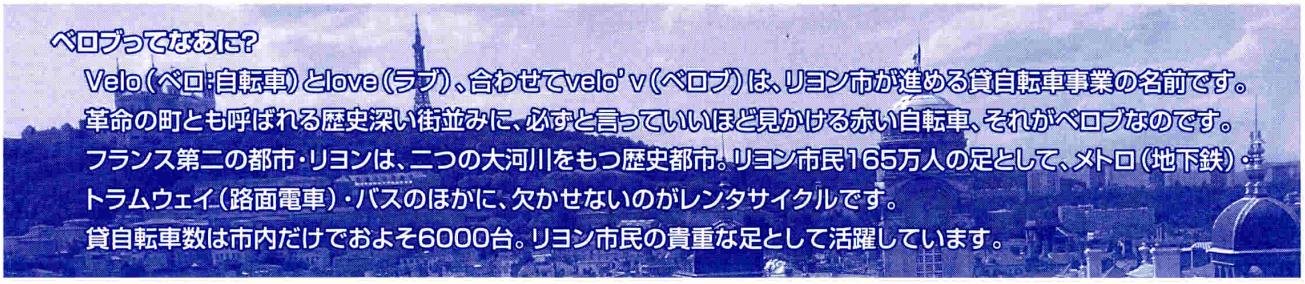
事務局からのお知らせ

京都市ごみ減量推進会議事務局では、22年度（4月）の定期異動で新たに2名のメンバーを迎えましたので、ご紹介させていただきます。

新島　智之（にいじま ともゆき）
前任者江川に代わって事務局にまいりました。21年度に民間企業等職務経験者枠で採用された「市職員1年生」です。職種は「環境職」で、前職は化学メーカーで研究・生産に携わっておりました。

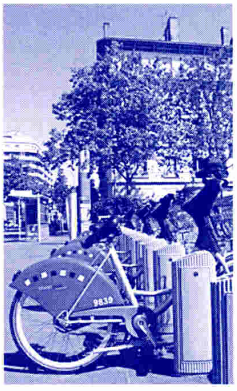
澁谷　充（しぶたに みつる）
前任者望月と同じく「環境共生推進員」であり、前所属は下京まち美化事務所です。エコまちステーションやその先にある地域とのつながりを大切に仕事を進めたいと思います。

エコさんぽ　～　リヨン編　～　・ベロブに注目！　～リヨン市のレンタサイクル事業～



ベロブってなあに？

Velo（ベロ:自転車）とlove（ラブ）、合わせてvelo' v（ベロブ）は、リヨン市が進める貸自転車事業の名前です。革命の町とも呼ばれる歴史深い街並みに、必ずと言っていいほど見かける赤い自転車、それがベロブなのです。フランス第二の都市・リヨンは、二つの大河川をもつ歴史都市。リヨン市民165万人の足として、メトロ（地下鉄）・トラムウェイ（路面電車）・バスのほかに、欠かせないのがレンタサイクルです。貸自転車数は市内だけでおよそ6000台。リヨン市民の貴重な足として活躍しています。



駅前のベロブステーション

【ベロブのしくみ】

ベロブは30分までレンタルが無料。路上300メートルごとにベロブステーションが配置され、30分前に次のステーションで自転車を乗り換えます。この仕組みにより実質的な無料化を実現しているのです。また、一日中乗り放題で1ユーロ（130円程度）。観光客にも人気です。

なぜこのような仕組みを、低予算で実現できたのか。ベロブ運営のカギを握る“JCデコ社”は、市が選出した広告会社です。リヨン市内の広告を優先的に取り扱える条件で、ベロブ事業を運営しています。

【リヨン市民にインタビュー】

ベロブをよく利用するという、リヨン市民のミロさんにお話を伺いました。

岡崎:ベロブはあなたにとってどんなものですか。

ミロさん:ベロブはとても便利。終電を乗り過ごした時や、車が出せない時には、特に利用しているよ。ストライキでメトロが不通になったら、ベロブに乗って出勤しているよ。

岡崎:さすがは革命の街。市民の強い味方ですね。

ミロさん:問題点もあるんだ。丘の上からベロブで降りてきた人たちが、登りはケーブルカーを使って帰っていく。だから下の街にベロブが溜まっちゃうんだ。それに、今は町中にJCデコ社の広告があふれている。景観的にもよくないし、もっと色々な企業に競争してほしいな。

岡崎:便利なレンタサイクル。それに伴ういろいろな悩みもあるようですね。

不法駐輪や駐輪場の不足が課題である京都市。京都の素晴らしい景観を守りつつ、みんなが気持ちよく暮らせる街にしたいですね。表紙の人・秦さんは、自転車でご近所を散策されているそう。緑さわやかなこの季節、あなたも、自転車に乗ってエコさんぽに出かけませんか。

ミロさんとベロブ

●この会報誌は私たちで作っています●

大　橋

松　村

中　村

岡　崎

京都市ごみ減量推進会議会報誌　こごみ日和　No.44

〒612-0031　京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
TEL：075-647-3444／FAX：075-641-2971
E-mail：gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp
URL：http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html
ゴミゲン・ネット　検索　で検索出来ます

【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により１９９６年１１月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動をする会員を募っています。

詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL：075-647-3444

企画編集：京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会
（会報誌・ホームページ小委員会）

古紙を含む再生紙に大豆インクで印刷しています。　PRINTED WITH SOYINK